



ナワールセンターの子どもたちが書いた作文から うれしいこと、悲しいこと

お母さんが病気なので、家の掃除をしてから、重いかばんを提げて学校に行きます。教室はいわしの缶詰みたいにギューギュー詰め。だって50人の子どもが狭い部屋にいるから。先生は杖を持って教室に来ます。先生はとても怖い。何か間違ってしまうと杖で叩かれるのではないかといつもびくびくしています。

いつも考えます。なぜ先生は杖で子ど

もを叩くのだろう？なぜ子どもを悪い言葉でののしるのかな？学校にはなぜコンピューターがないのだろう？なぜ図工の時間も音楽の時間もないのだろう？どうして私たちの学校はこんなにひどいのかしら？

学校が終わるとすぐにナワールセンターに行くの。センターが大好きです。センターには私の夢と希望がいっぱいあ

るから。ダブカ（民族舞踊）や劇に参加します。それからリーダーとしてもがんばっています。先生はやさしいし、私たちが思うことを表現しても怒られりません。子どもにも権利があるって分かります。学校がセンターみたいで、学校の先生がセンターの先生みたいだったらいいな。

ファティマ、11歳

ラワンという女の子が、ピウク通りに7人の家族と住んでいます。家は封鎖のために貧しくて、食べ物も不足しています。毎日の生活が大変なので、子どもの楽しみは買ってもらえません。ラワンがお父さんに学校で使うノートを買ってくださいというと、お父さんは「明日」というのですが、決して買ってくれません。

時々朝ごはんがありません。朝ごはんは？と聞くと、お母さんは怒って「そ

のあたりのものを何か食べなさい」となるけれど、何もなくて、ご飯を食べずに学校に行くことがあります。

ラワンが一番悲しかったのは、お父さんが怖い顔をして、「うちにはお金がない、封鎖で毎日どんどん貧乏になっているから、二度と何か買って欲しいなんていうな」といったこと。それから、ラワンがテレビで大好きなアニメを見ていると、お母さんは「テレビを消しなさい」といいます。だからテレビを

消して布団に入って悲しい気持ちで疲れたまま眠ります。

楽しいことは他の子どもみたいにたくさんないけど、おじさんの結婚式の際に、お母さんがきれいなドレスを借りてくれて、白い靴を買ってくれて髪飾りをつけてくれたことは覚えています。きれいになってうれしくて、ずっと踊って、花嫁やおじさんと一緒に写真をとりました。

ラワン、11歳

うちは仲の良い家族ですが、時々はそうではありません。お父さんとお母さんのことに親戚がいろいろと口を出すからです。両親がけんかをすると、僕たちの気持ちにも影響します。僕たちは静かで気持ちの良い生活を望んでいて、暴力はいやです。

ぼくが悲しかったのは、お母さんが家を出て行って、実家から1ヶ月帰ってこなかったことです。僕たちの面倒を見てくれる人はいなくて、お父さんは怒ってばかりでした。僕たちはお母さんが早く帰ってこないかとばかり考えていました。

病院のそばにある学校は遠いです。途中で市場を通ります。市場ではよく戦闘が起きます。それから、子どもたちが野菜を売っています。他の子たちは物乞いをしています。学校の前でガムなんかを売っている子どももいます。

アラ、12歳